

A-16 80才以上の高齢者に対する人工呼吸管理の有用性

昭和大学藤が丘病院 救急医学科
呼吸器内科*

刑部義美 門川 誠 秋沢孝則* 兼坂 茂 成原健太郎 高橋愛樹

最近の医学の進歩は目を見張るものがある。これに伴い、世界の先進国と同様、我国でも全人口における高齢者の割合が増加し、1985年には10%を突破し、更に21世紀には20%以上にもなる事が予想され、4人に1人が老人となる日も、そう遠い事ではない時代がすぐそこまできている。この様な状況の中、救急医療の現場に於いても高齢者の搬送が増加してくる事が予想され、現に当センターでも80才以上の高齢者の搬送件数が年々増加傾向にある。しかし、搬送されてきた高齢者に集中治療がなされる場合、多くの(社会的、経済的)問題が山積している事も事実である。そこで、センターに搬送された80才以上の高齢者で集中治療を必要とした症例の社会的な問題や更に経済的な問題をも含めた検討を行い、来るべき高齢者社会に対応していく為の方針を一考した。対象は1985年4月～94年3月までにセンターに入室した80才以上の患者156例中、集中治療を行った36例を対象とした。性別は男性22例、女性14例、年齢は男女間に有意差はなかった。36症例の生存例と死亡例の検討より生存例は22例(61%)と、かなり高い生存率であった。性別では男性12例、女性10例であった。死亡例は14例(39%)、死亡例の多くは男性であった。36症例のセンター入室の原因となった疾患を検討したところ、最も多かった疾患が中枢神経系疾患で19例(生存11例、死亡8例)、次いで呼吸器系疾患が7例(生存3例、死亡4例)、以下循環器系、消化器系疾患が各3例、腎系、その他が2例と続いた。センター入室前の既往症の検討では(既往歴のカウントは1人が2つ以上持っている事もあり、重複もある)、循環器系疾患が15例(生存10例、死亡5例)と最も多く、次いで既往歴なし症例が9例(生存5例、死亡4例)と2番目に多かった。以下高齢者特有の中枢神経系が8例(生存、死亡ともに4例)、呼吸器系が5例(生存3例、死亡2例)、代謝が3例であった。患者の背景因子の一つとして最もポピュラーな飲酒と喫煙について検討した。生存例では飲酒、喫煙、及び

その両方を嗜好しない症例が死亡例に比し明らかに少ない事が判かった。次に、センター入室前の機能評価と生存例のセンター退出時の機能評価を検討した(ここで言う機能とは患者が、独立して生活が出来る為の機能でGOOD, FAIR, POORの3段階に分類した)。入室時の機能評価からは生存例、死亡例は共に有意差はなかったが、退出時には機能は明らかに低下している症例が多かった。予後と経済的問題の検討から、センターに入室し、一般病棟に転出できた症例が22例(61%)あったが、最終的にGOOD状態で完全社会復帰できた症例は、わずか3例(8%)だけであった。他の19例は、植物状態が2例、死亡例が17例であった。センター入室から本院を退院するまでに総額で6,650万円かかり、一例あたり約185万円かかった事になった。更に完全社会復帰した3例に限ってみると、1例助ける為に、約2,200万円を費やした事になった。最後に集中治療症例の治療方針をある程度早期に決定するために、酸素化能の指標であるRespiratory Index(RI)と肺の障害及び呼吸不全の重篤度の指標としての全コブライブス(C_{PT})を初日と3日目と比較した。結果は生存例ではRI及びC_{PT}は共に日数による有意差はなかったが、死亡例では初日に比し3日目の方が有意に悪化している事が判った。考案：高齢者の集中治療を行う場合、現在論理的、社会的問題を含め多くの因子が関与しているが、最も重大な関心は経済的な問題であるように思われる。疾病治癒後の寝たきり、植物状態になった老人の介護を誰がするのか(家族、医療施設?)、いずれにしても莫大な金額が予想される。このため、我々は高齢者の治療を行う上において、患者の背景因子と共に酸素化能の指標であるRIやC_{PT}を測定する事により高齢者の予後を判定する方法の一つになり得るのではないかと考えた。